

『就実論叢』第42号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2013年2月28日 発行

アルフレッド・シュッツ研究

—ヨーロッパ社会学史の一齣—

A Study on the Sociological Theory of Alfred Schuts

山 川 基
小 笠 原 真

アルフレッド・シュッツ研究

——ヨーロッパ社会学史の一齣——

A Study on the Sociological Theory of Alfred Schuts

山 川 基
小笠原 真
(奈良教育大学名誉教授)

1. はじめに——問題意識の所在

本小稿で取り上げるアルフレッド・シュッツ (Alfred Schutz, 1899-1959) といえば、端的には「オーストリアの社会学者」⁽¹⁾、「ウィーン生まれのアメリカの社会学者」⁽²⁾、「フッサールの弟子」⁽³⁾、「現代の現象学的社会学の出発点に位置する社会学者、哲学者」⁽⁴⁾と見なされてきた。さらに「パーソンズの論敵、現象学的社会学の祖」⁽⁵⁾、「シュッツは弁護士で経済学者で実業家で哲学者でもあった」⁽⁶⁾、さらには「オーストリアのウィーンに生まれた社会学者、社会学者、現象学者、音楽学者、現代の現象学的社会学の基礎を築き、日常生活の社会学、生活世界の社会学、エスノメソドロロジーなどにも道をひらいた」⁽⁷⁾とも見なされてきた。

あるいは、また彼 (シュッツ) を、幾分詳しく紹介したものとして次のような言説がある。すなわち、「現象学的観点を社会学に導入した社会学者としては、T. リットや、G. ギュルヴィッチ、A. シュッツなどがあげられるが、1960年以降の現象学的アプローチの再興をうみだした直接の理論的な系譜はシュッツである。……シュッツはウェーバーの理解社会学をフッサール現象学によって基礎付けようとし、社会成員が日常生活世界において使用する類型に着眼した類型論や、生活世界の様々な多元的現実論を展開した」⁽⁸⁾とか「アメリカ社会学において、1960年代以後の現象学的社会学やエスノメソドロロジー興隆の基礎をつくりあげた社会学者。M. ヴェーバーの理解社会学とフッサールの現象学を批判的に総合し、社会的行為が膨大な日常的知識に基づく意味世界を前提としていることを示した」⁽⁹⁾と。また、「ナチスの政権獲得において多くの社会学者が亡命を余儀なくされたことは、ドイツやオーストリアだけでなく、ひろく戦後の社会学の展開にとって無視することのできないインパクトを与えたが、1960年代に始まる現象学的社会学とエスノメソドロロジーの基礎を築いたシュッツもその一人である。M. ヴェーバーの行為論を起点としてフッサールの現象学とベルクソンの持続の哲学によって理解社会学の認識論的・方法論的な構築にむかい社会的世界の意味構成につとめたシュッツの試みた、40年代にかわされたパーソンズとの論争を含めて、行為理論の展開に重要な足跡を残している」⁽¹⁰⁾といったものもある。

さらには、次のようにシュッツを紹介したのも見られる。その1は「シュッツとその弟子であるバーガーやルックマンたちの仕事は『現象学的社会学』と銘打たれているけれども、実は、戦前のシェーラーやフィアカントらの『現象学的社会学』とはほとんど無縁なものである……シュッツの仕事が『現象学的』だといえる側面をしいて言えば、それは、日常生活者たちが自分たちを取り巻く世界をどのように理解し、何を自明なこととみなしており、どこに彼ら自身が気づいていない亀裂やズレがあるかを、『外部観察者』の視点から記述しようとした点にある。それはフッサールの『現象学』が、日常のおよび専門的認識の営みにおける自明性の構造を『括弧に入れ』て、その外部から分析することで認識のメタ理論を構想していたのに似ている。シュッツは日常的生活世界のメタ理論を社会学として構想したのである」⁽¹¹⁾。その2は「シュッツはウィーン大学を出たオーストリア人で、33歳でフッサールの現象学に深く定位した『社会的世界の意味形成』(1932)を出版した。この書の題名に使われている『社会的世界』という語は、フッサールの語ではなくシュッツ自身の語であった。それは、自我と他者との相互行為におけるふれあいをつうじて形成していく、複数個人によって共有された意識の世界を意味していた」⁽¹²⁾といったものである。その3は「ウィーンのユダヤ人銀行家の家に生まれる。銀行で実務につくたわら完成させた『社会的世界の意味構成』はフッサールの称賛をあげた。1939年ナチにおわれニューヨークへ、ここでも実務と研究の二重生活を送るが、New School for Social Researchの教授となる(1952)と同時に研究に専念、日常生活の現象学的研究およびその多元的現実の理論は、バーガーやガーフィンケルにつよい影響をあたえた。生前に出版された著作は上記の一冊であり、死後弟子たちによって論文集が編纂された」⁽¹³⁾と記述されたものである。

それ故、本小稿では共著者の一人による『ヨーロッパ社会学史断章』の1章として「アルフレッド・シュッツ研究——ヨーロッパ社会学史の一齣——」として組み込むためには、上記に記した「オーストリアの社会学者」として活躍した当時であって1932年にドイツ語で刊行され、しかも生前にあつて唯一の著作たる大著 *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*——わが国では管見の範囲でも『社会的世界の意味構成』⁽¹⁴⁾と『社会的世界の意味附带的構造成態』⁽¹⁵⁾の二種の訳語が見られるが、本稿では前者を用いることにする——こそ俎上にのせ、シュッツの社会学理論を解明することが、さしあたり我々に課せられた作業であろう。その際、上記の「ウィーン生まれのアメリカの社会学者」として活躍したシュッツの後半世の20年間に、彼は約50編に及ぶ社会学と哲学の論文をほとんど英語で書き、そのうちの約30編が死後弟子たちによって『アルフレッド・シュッツ著作集』全3巻 (*Collected Papers*, vol.1,1962, vol.2,1964, vol.3,1966)として編纂された。また、シュッツの未完の理論的研究たる『レリバンスの問題についての考察』 (*Reflections on the Problem of Relevance*, 1970)や、さらにはトーマス・ルックマン (Thomas Luckmann, 1927-)との共著『生の世界の諸構造』 (*Strukturen der Lebenswelt*, Bd. I, 1975, Bd. II, 1984)も死後ドイツから刊行されているので、こうした諸文献にも必要に応じて言及出来ればと考えている。

2. シュッツの生涯と業績

アルフレッド・シュッツは1899年4月13日オーストリアのウィーンで銀行支配人の父オットー・シュッツと母ヨハンナの間に生まれた一人息子である。そして、当時のウィーンはオーストリア＝ハンガリー帝国の首都であった。長じて彼は17歳の時に第一次世界大戦のあおりで、緊急高校卒業資格試験を済ませ、ただちにオーストリア軍の砲兵連帯見習士官として1年半兵役に従事した。やがて大戦後の1918年母親のすすめでウィーン大学の法律・国家学部に進み、純粋法学の権威ハンス・ケルゼン (Hans Kelsen, 1881-1937) や、経済学者でマックス・ヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) の最も厳しい批判者の一人であったルトヴィッヒ・エドラー・フォン・ミーゼス (Ludwig Edler von Mises, 1881-1973) や、哲学者のルドルフ・カルナップ (Rudolf Carnap, 1891-1970) の下で勉学し始めた。その際シュッツは、学問的にはヴェーバーの思想に魅力を感じたが、個人的に知るようになったエドムント・フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) の「現象学的」哲学の見地から解明展開しようとした。

その研究成果こそ本小稿で解明しようとしている彼の生前の唯一の著作『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』 (*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt —Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, 1932) である。しかも、ちなみにこのシュッツの『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』はカルナップの『論理的世界の構成』 (*Der logische Aufbau der Welt*, 1928) を敷衍してヴェーバーの理解社会学を要請する意味でこのような表題がつけられたといわれる⁽¹⁶⁾。

ところで、シュッツはウィーン大学では、国際法を専攻し、1921年法学博士の学位を取得している。と同時に、彼はオーストリア銀行協会に勤務し、秘書として中央ヨーロッパ諸国の銀行事情の調査に従事し、関連企業の法律・経済顧問として働く。そして29年にはライトラー銀行に転職し、ハンガリー、チェコ、ドイツ、オランダ等の国々における事業立法や銀行業務に関する助言および調査活動を継続しつつ、ライトラー銀行の現場指揮に従事する。このように見てくると、シュッツは純粋のアカデミー人ではなかったことは明白である。死の直前の数年間を除いて、彼は「昼は銀行家であり夜は学者である」という、いわば二足の草鞋をはいていた。加えてシュッツは大の音楽愛好家——否むしろ第1節で記述したように音楽学者という表現すらあったように——でもあった点を見落としてはならない。つまり、学生時代からの友人が指摘しているようにシュッツはドイツの作曲家大バツハ (Johann S. Bach, 1685-1750) の「マタイ受難曲」や「ヨハネ受難曲」暗唱していたし、また彼のカンタータやゴルトベルグ変奏曲も諳んじていた。したがって、イルゼ夫人 (Ilse Schutz) も「銀行の勤めから帰宅すると夫は真っ先にピアノに向かって歌い、弾くのがつねでした」と語っているほどである。否そればかりか「音楽を共演する」や「モーツァルトと哲学者」といった、正に音楽学者としての研究もみられる⁽¹⁷⁾。

さて、シュッツは1924年から28年にかけて、特に夏季休暇などを利用して、マックス・ヴェーバーやアンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の影響のもとに最初の草稿

「生の諸形式と意味構造」(Life Forms and Meaning Structure, 1924-28, trans.Helmut R.Wagner, 1982) や「生の諸形式の理論」(Theorie der Lebensformen, 1924-28) を執筆する。その間の1926年にはイルゼ・ハイムと彼は結婚する。そして、ドイツの哲学者フッサールが1928年に刊行した『内的時間意識の現象学』(*Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*) を機に、フッサール研究に取り組み、その研究成果ともいべきシュッツの生前の唯一の著作こそ『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』である。こうしてフッサールの知遇を得るとともに、彼(フッサール)の死まで両者の親交が続いたようだ。そして、主著『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』の劈頭で「本書を故尾高朝雄教授に捧げる」と記述し、また「序言」のなかでは「京成大学の尾高朝雄教授(日本)に対し私は深甚なる謝意を表したい。私の思想に示された教授の深い御理解と積極的な御援助がなければ、今日のような困難な時局の下で本書を出版することは、おそらく不可能であったにちがいない」と記述しているが、この尾高朝雄博士をウィーン滞在中にシュッツに紹介したのもフッサールであった点を考えると、フッサールと日本の学会との間に深い因縁のあったことも判明しよう⁽¹⁸⁾。

しかしながらフッサールの死後シュッツが語ったフッサールとの交誼の回想録のなかでは、「私のフッサール哲学への入門は極めて変則的であった」と述懐しているように必ずしも一貫したものではなかったようだ。つまり、上記の1932年の『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』では少なくとも未だフッサール現象学に対する批判を展開するに至っていない。それどころか、『シュッツ著作集』第1巻に寄せたH. L. v. ブレーダの序文が教えるように、「この研究(1932年の著作を指す)においてシュッツはフッサールの現象学に出会うべくして出会った。社会諸科学によって実行もされ目指されてもいる意味理解を哲学的に基礎づけること、それはその源泉を意識の生そのものの中に発見し直すことである。この点に関してシュッツはベルクソンの思想に留目しなかったわけではなく意識の直接的与件や生きられる持続への還帰を逸したわけではない。がしかし、シュッツの省察を導きそれに特有の方向付けを与えたのは志向性、間主観性、生活世界といったフッサールの諸概念なのである」⁽¹⁹⁾ と、その直接的影響力すらあったのである。ところが、シュッツが晩年に著述した「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」(*Das Problem der transzendentalen Intersubjektivität bei Husserl*, 1957) では、フッサール批判が展開されているからである⁽²⁰⁾。

ところで、ヨーロッパ時代のシュッツにとって1933年から38年にいたる時期は、オーストリアでの市民生活は不安定そのものであったようだ。それというのも、政府はE. ドルフース(Engelbert Dollfuß, 1892-1934) やK. シューシュニク(Kurt Schuschnigg, 1897-1977) において率いられ、オーストリア・ナチ党と社会民主党を弾圧し、身分制的独裁体制を樹立するものの、首相ドルフースは1934年7月25日に暗殺され、やがてA. ヒットラー(Adolf Hitler, 1889-1945) の脅威を前にドイツ・ナチズムと融和政策をとり、次第に破局の道を歩んでいくこととなる。こうした動向に対してシュッツの仲間たちはいち早く「西方への移住」

策を開始することとなる。1937年シュッツ一行はライトラー銀行の資産移転をアメリカに準備すべく全米大商用旅行を敢行し、翌38年のナチスによるオーストリア「併合」の時も彼はパリへ商用旅行中の身であった⁽²¹⁾。

そして、1939年を迎えると、ついにシュッツ一家はアメリカへ亡命することになり、彼の合衆国における後半世20年間の幕がニューヨークで切って落とされることとなる。と同時に、ここからシュッツの学問の新しい地平、別言すれば、アメリカの社会学や社会心理学や哲学との接触が開始されることになる。もっとも新天地でもシュッツは依然として実務と研究の二重生活を送ることとなる。そして、亡命後のアメリカでの彼の一連の研究は、このアメリカの社会学、社会心理学、哲学との触れ合いによる現象学的考察の深化と展開として特徴付けることも可能であろう。その一例を挙げれば、アメリカの心理学者で哲学者でもあった W. ジェームズ (William James, 1842-1910) の「下位宇宙」(subuniverse) 論に示唆を受け、シュッツは「至高の現実」(paramount reality) とか「多元的現実」(multiple realities) といった概念を構築しているのがそれである。すなわち、ジェームズの「下位宇宙」という語を、シュッツは「現実のアクセント」を与えることによって成立する限定的な意味領域という表現に変え、各々の意味領域に固有な認識様式との関連で諸々の多元的現実を示した。夢や空想の世界、科学的思考の世界などがその例であるが、シュッツはそうした多元的諸現実のなかで、「至高の現実」があるとし、それが「日常生活の世界」、時には「労働の世界」であるとしたのである⁽²²⁾。

また、シュッツのアメリカ社会学との接触では、一方ではある種の対立を伴ったことも少なくない。例えば、1940年ハーバード大学で T. パーソンズ (Talcott Parsons, 1902-79) の「合理性——ゼミナール」でシュッツは講演し、以降1940年から41年にかけて、パーソンズの『社会的行為の構造』(The Structure of Social Action, 1937) をめぐって、両者の間で往復書簡が交わされていたのがそれである。すなわち、幾分説明を加えれば、両者はマックス・ヴェーバーの行為概念をともに重視しながらも、彼らはこの論争から有意義な結論を導きだせなかったようである。つまり、パーソンズが後年シュッツに同意出来なかった主要な論点として、(1)「事実とは経験についての言明である」というパーソンズの命題をシュッツが承認しなかったこと、(2)シュッツが「理論」をフィクションとしたこと、(3)シュッツのいう「日常生活」アプローチではマクロ社会学的事象はとらえられないとパーソンズが主張したこと、以上の三点があったと回想している⁽²³⁾。

しかしながら、シュッツのアメリカ社会学との接触では、他方では W.G. サムナー、W.I. トマス、C.H. クーリー、C.H. ミード、W. ジェームズ、R.K. マートンなど当時のアメリカの代表的社会学者の文献を丹念にフォローし、やがてそのなかから特にシカゴ学派の社会学の一人 G.H. ミード (George H. Mead, 1863-1931) の象徴的相互作用論や、プラグマティズムの創始者 W. ジェームズの要素主義に反対して「意識の流れ」を重視する機能主義的心理学といったものと、ヨーロッパの現象学とを橋渡しするという偉業をなしとげた点も見逃しては

ならない⁽²⁴⁾。

ところで、シュッツは1943年から『新社会研究学院』（New School for Social Research）の講師、44年以降は客員教授、そして52年には社会学教授となり、56年にはライター銀行を辞し、ようやく「二重生活」に終止符を打ち、大学院のフルタイム教授となる。ところが、翌年の1957年には彼の肉体に病魔が襲い最初の重大な兆候が現われる。そして、シュッツは1959年5月20日ニューヨークで死去する。享年60⁽²⁵⁾。

なお、シュッツの著作は1932年に刊行された生前の唯一の著作『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』を除いては、ほとんど遺稿であり、彼の友人や高弟たちによって編集された。それが本稿第1節で記述した『アルフレッド・シュッツ著作集』全3巻等である。加えて、シュッツの影響は、生存中は比較的弱かったが、幸い『新社会研究学院』で彼の指導を受けた人びと、例えばエスノメソドロジストたちやシンボリック相互作用論者たちに与えた影響力を通して、シュッツ研究も益々高まってきた。それ故、ここで「エスノメソドロジー」(ethnomethodology)と「シンボリック相互作用論」(symbolic interactionism)について若干説明を加えておきたい。まず「エスノメソドロジー」とは『新社会研究学院』でシュッツより直接指導を受けたアメリカの社会学者 H. ガーフィンケル (Harold Garfinkel, 1917～) の命名した分野であって、人々が日常生活を構成してゆく方法について研究する社会学である。そして、この「エスノメソドロジー」は、既成の社会学特にパーソンズによる構造機能分析は普通の人びとを一面化して非現実的な存在に仕立てた上で実体化していると批判する。こうして、エスノメソドロジストたちは、人々が日常世界を構成するその仕方の探求を提唱する⁽²⁶⁾。次いで、1960年以降 H.G. ブルーマー (Herbet G.Blumer, 1900-87) や E. ゴフマン (Erving Goffman, 1922-82) らによって新たに展開されてきた「シンボリック相互作用論」は、人間をシンボル動物として規定し、シンボルによる人間の主体性を強調し、積極的・創造的存在としての人間像と変化・変容するダイナミックな過程としての社会イメージを有している。そして、ブルーマーによると、(1)人間は意味に基づいて行為すること、(2)意味は社会的相互作用過程において生じること、そして(3)意味は人間によって解釈されること、以上の三つが「シンボリック相互作用論」の前提である。このような観点から、シンボリック相互作用論者たちは自我、役割、準拠集団、コミュニケーション、集合行動、逸脱、病気、高齢化、死などの具体的事象に接近する。しかもその際、自然科学的方法とは異なり、行為者の立場に立って人間の内面を明らかにしようとする点に特色をもっている⁽²⁷⁾。

3. シュッツの『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』

まず、この節で取り上げるアルフレッド・シュッツの生前に刊行された唯一のドイツ語版著作『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』(Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt——Ein Einleitung in die verstehende Soziologie ——, 1932, Wien, Springer-Verl.) の再販(第2版)も同社より1960年に、そして第3版8000部はペーパーバックで、フランクフル

トのズールカンフ社より出版されている。また、その英語版『社会的世界の現象学』(*The Phenomenology of the Social World*, 1967, Northwestern University Press, trans. by George Walsh and Frederick Lehnest) も1970年に初版が、そして72年には重版され、さらに日本語版『社会的世界の意味構成——ヴェーバー社会学の現象学的分析——』(佐藤嘉一訳、木鐸社、1984年) も広く世に問われ、今日の社会学の展開、とりわけ1960年代に始まる P. バーガー (P. Berger, 1926-) らの「現象学的社会学」や、前節(第2節)でも触れた「シンボリック相互作用論」や「エスノメソドロジー」に基礎を与えたものとして、改めて注目の一書となってきた⁽²⁸⁾。

そこで、本書の具体的な内容を検討するに先立ち、「日常生活の社会学」を提唱するに至ったシュッツの見解を、ここで予め整理しておこう。従来、現象学と社会学を結び付けることは極めて困難とされてきた。というのも、現象学が世界を〈括弧入れ〉の上に成立するとすれば、経験科学としての社会学はその〈括弧の取り外し〉の上に成立するからである。この意味で厳密な意味での現象学的社会学の可能性に疑問を呈する向きもある。こうしたなかにあって「内世界的社会性における意味現象を分析」することに研究意図を限定しながらも、フッサールの「生活世界」の概念や「自然的態度の構成的現象学」という構想に導かれて、日常生活のアプリオリな構造を、それを構成し、体験しつつある行為者の意識の志向的なはたらきという観点から解き明かすという形で社会学と現象学とを結び付けようとしたのがシュッツの「日常生活の社会学」である⁽²⁹⁾。

そして、シュッツが一貫して関心をもっていたのは、社会科学の哲学的な根拠づけの問題、つまり、主観の意味を対象とする客観的科学はいかにして可能であるかという問題であった。自然科学とは異なり社会科学が対象とするのはさまざまな社会関係のなかで活動しつつある行為者としての人間である。彼らはそれぞれに固有の生活史や歴史的社会的背景に由来する知識のストックをもっており、それに基づき、他者との日々の相互作用を通じて、身の回りの世界をたえず意味づけ、解釈し、あらたに構成しつつある。つまり社会科学がとり扱う事実や出来事はすべて行為者の主観の意味によってすべて媒介されており科学的操作に先立ってすでに意味的に構成されたものとして存在する。それ故、客観的で厳密な社会学が可能であるためには、恣意的な科学的構成物を外部から持ち込むのではなくこの社会的世界の意味的な構成のされ方それ自体を、対象に即して明らかにする必要がある。こうして、シュッツは学問を含めてわれわれの一切の営みや経験がそれを前提にすることによってのみ可能となるような共通の背景知としての日常生活を意味的に構成しつつある行為者の主観的過程を理解的に再構成するための方法として、現象学を導入した。したがって、彼の場合現象学といっても内世界的レベルからの日常世界の記述的分析に焦点は絞られた。経験科学の基礎はフッサールが提唱する超越論的意識の現象学であるのではなく、他者の存在を自明視して、これと交わる自然的態度の体験的世界である、とみたからである。こうして、シュッツの自然的態度の構成現象学は誕生してきたのである⁽³⁰⁾。

では、前置きが少々長くなったが、シュッツの『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』（以下『意味構成』と略記する）では、彼の自然的態度の構成現象学の根本主張は具体的には如何なる意味内容のものであろうか。別言すれば、シュッツの理論は社会的世界の根本構造を内省的かつ自己論理的に解きほぐす点に特徴があるが、その内実はどのようなものであろうか。

さて、本書『意味構成』は、第1章「予備的考察」第1節「問題提起のための序言」をもって始まり、第5章「理解社会学の根本問題」第50節「結び——今後の問題の指摘」をもって終わる。5章50節からなる大著であって、シュッツが生前世に問うた最初にして唯一の著作でもある。そして、本書の何よりの特色は20世紀最大の社会学者であったドイツのマックス・ヴェーバーの「理解社会学」(verstehende Soziologie) を祖上に載せ、フランスの哲学者アンリ・ベルクソンの生の哲学やドイツのエドムント・フッサールの現象学を介して、独自の社会学的基礎理論を構築せんとしたところにある⁽³¹⁾。

そこで、まず第1章「予備的考察」では、M. ヴェーバーを一方で「同時に多種多様な思潮を総括しているヴェーバーの著作はその驚くべき天賦の才による全くの個人的な成果である」と評価しながら、特にヴェーバーの方法論的志向性における優位性を評価する。すなわち、「重要なのはヴェーバーのあらゆる種類の社会関係と社会形象、あらゆる文化対象と客観精神の領域を個人の社会的行為という最も原初的な事象の要素にまで遡って照合していることである。……客観的精神の世界を個々の行為に還元するという原理は、マックス・ヴェーバーの理解社会学の対象規定にみられるほど徹底した仕方において行われたことはこれまで一度もなかった」と⁽³²⁾。

しかるに、他方でシュッツはM. ヴェーバーの理論作業の限界もまたあるとして次の点に求めている。やや長文であるが、彼は言う、「彼の社会的世界の分析は、社会事象の諸々の要素をこれ以上還元できない、あるいはこれ以上に還元を要しない形態においてははっきりさせたごくうわべだけのところで中断されてしまっている。個人の有意味で理解可能な行為という概念は、理解社会学に固有の根本概念である。けれどもこれは決して社会事象の純粋な要素の一義的な確定を意味しない。むしろ多岐にわたるより詳しい考察を必要とする問題のための見出しにしかすぎないのである。ヴェーバーは経過としての行為 Handeln と既に完了した行為 Handlung、産出活動 Erzeugen の意味と産出物 Erzeugnis の意味、自己の行為と他者の行為あるいは自己体験と他者体験、自己理解と他者理解を区別していない。彼は、行為者がいかに意味を構成するかについて問題にしないし、またいかに意味が社会的世界における参与者や局外の観察によって修正変更されるものであるかについても問題にしない。また『他者理解』現象の正確な把握にとって、自己心理的なものと他者心理的なものとの固有の根本連関を明らかにすることは不可欠であるのに、これも問題にしない」⁽³³⁾と。

そこで、シュッツは「ヴェーバーによれば、理解社会学の課題は『社会的行為を解明しつつ理解する』ことにある。社会的行為とは、この場合、『行為者もしくは諸行為者によって

思念された意味に従って他者の行動に関係づけられ、またその経過がこの行動に方向づけられるような行為』のことである。『行為は、その場合行為者もしくは諸行為者がそれに主観的意味を結びつけるときの、またそのかぎりでの人の行動を指している。』このヴェーバーの基本的な定義は、真っ先に考察してみる必要がある⁽³⁴⁾と主張する。

そして彼は、ヴェーバーの場合、まさに分析の基礎となっている行為者の「主観的に思念された意味」概念には、「意味」をあらかじめ五つの層に解析しておき、そこから「社会的行為という概念における三つの大問題圏」を確認してみせる。そこで、ここでは三つの大問題のみを哲学者廣松渉（1933-94）に倣って示せば、(1)「行為者が彼の行為にある意味を結びつけるという言明は何を意味するのか?」、(2)「どのようにして他我が自我に有意義なものとして先与されているのか?」、(3)「どのようにして、自我は他我が行動を、(a)一般に、(b)そのような行動者の主観的に思念された意味に則って、理解するのか?」の三つが提示される⁽³⁵⁾。そして、(1)の問題を具体的に詳述したのが『意味構成』の第2章「自己自身の持続における有意義な体験の構成」であり、(2)の問題を取り上げたのが第3章「他者理解の理論の概要」であり、そして(3)に関連するテーマが、第4章「社会的世界の構造分析——社会的直接世界・共時世界・前世界」である。この主要3章（つまり第2章から第4章まで）を受けて、最終章＝第5章「理解社会学の根本問題」では、いわばさきの三大問題圏に続く(4)「社会的世界を適切に調べるためには、社会科学はどのような方法を用いなければならないのか?」が究明されている。

では、第1章「予備的考察」の末尾で「これより私たちが取り組む考察は、理解社会学に従来欠落している哲学的基盤を与え、現代哲学の確かな成果によってこの理解社会学の根本的な見地に挺入れするという目的をさらに追究することである」⁽³⁶⁾と強調しているが、それではこの「挺入れ」作業をシュッツはどのように進めるのであろうか。

まず、第1の問題つまり「行為者が彼の行為に或る意味」を結びつけるという言明は何を意味するか?」について、シュッツはこの問題を「自己自身の持続における共意味な問題の構成」として捉え、第2章で詳細な検討を加えている。それにしても、廣松も指摘しているように長い時間をかけてパッチ・ワーク風に成ったシュッツのこの著作を読み解くには、読者の側にも相当の忍耐を強いることになるが、まさに第2章はそうした感じを強く抱かせる章である。だが、そんなことは言っておれない。そこではシュッツは「意味問題は時間問題」であるとの認識の下、「時間」の概念を導入することによってこの問いに答えようとする。この意味でシュッツの行為理論は時間の学であって、シュッツの視点からみれば、ヴェーバーの基本的諸概念は不十分なものとなる。例えば、ヴェーバーの「行動」(Verhalten)と「行為」(Handeln)との区別を無効とする。何となれば、彼によれば「行動」と「行為」はともにフッサールのいう「意味付与的意識体験」に他ならず、2つの概念の差異は意味付与的意識体験という「自我の能動的体験」に対する自我の「配意作用」の違いに過ぎない。つまり、シュッツは言う「経過し、生成したある体験に配意しつつ、これを持続のなかの他のあらゆる体験

からはっきり区別されたものとして際立たせるような反省的眼差しが、この体験を有意味なものとして構成する。発生的に最初の種をまく『自発的能動性』——この自発的能動性『から』明確に境界づけられた単位として際立たされる体験が『産出され』るのであるが——への志向的遡及関係が取り結ばれて、そこからそのような配意において有意味的な行動は、またそれを通して構成される。これに加えて反省的眼差しは投企をも、したがって経過したであろうと未来完了時制的に想像した行動についての創造体験をも把握する。そのようにしてこの反省的眼差しは、眼差しのなかで把握した『明確に境界づけられ投企された、自発的能動性に基づく体験』を有意味的な行為として構成するのである⁽³⁷⁾と。それにしても、このようにフッサールの見解に依拠しつつシュッツが苦難の省察を重ねているのも、ヴェーバーの理解社会学に哲学的基礎付けを与えつつ、批判的に改作する企図からである。

次いで、第2の問題「どのようにして、他我が自我に有意味なものとして先与されているのか？」について究明することこそ、第3章「他者理解の理論の概要」(Grudzüge einer Theorie des Freundverstehens)の主要テーマである。ところがこの章の冒頭で「単独の自我の分析から社会的世界へと考察を移すに伴い、単純の精神生活における意味現象の分析の際に用いた厳密な現象的方法を脇に置き、人々のなかで日常生活を送ったり社会科学に携わる際に習慣となっている素朴で自然的なものの見方で社会的世界の存在を理解する。同時に単独の自我の意識のなかに他我がいかに構成されるかという固有の超越論的・現象学的な問題に立ち入ることを一切断念する」⁽³⁸⁾と明言する。つまり、彼は厳密な意味での現象学的分析を放棄して「自然的態度の構成現象学」の次元に留まることを示唆する。そして、シュッツのこの自然的態度の構成現象学による他者分析は、今日の「日常生活の社会学」と呼ばれ、社会理論の嚆矢をなすものである。

そこで、「他者理解」(Freundverstehen)に関する最も根本的な問題を、シュッツは他我が彼自身の体験を自己解釈すると同じような仕方でも、自我もまた他我が体験を解釈することが出来るであろうかの点に求める。そして他者理解の固有な構造は解釈者の側の解釈視座とつねに相関するという観点から、他者理解の多元性と多様性を示唆する。そしてその中心にあるのは、解釈者としての日常人の自我である点を確認する。日常人は素朴なかたちで自分の日常生活世界をそこで占める自分の位置のまわりに築かれたものとして意識する。中心としての自我のまわりに、他者とともにある社会的世界は千差万別の親密性と匿名性において系統立てられている。この親密性と匿名性はいわば日常人の他者に対する解釈視座の遠近法的構造の異なる表現でもある。それ故、日常人の最も身近にいる他者は、面対面的関係にある汝である。日常人はこの汝といわば親密な「時間と空間の共同態」的關係を結ぶ。ここでは汝の身体、身振り、歩きぶり、顔の表情などを直接的に観察できるばかりでなく、これらのものを汝の意識体験のしるしや証拠として、生きた現在において把握する。まさに汝はここでは類のない状況における類のない個体としての他者である。日常人はこの親密な面と面関係から遠のくにつれて、他者との体験の共有関係を次第に喪失していく。日常人は程度は

まちまちであるにせよ益々匿名的で類型化された他者を意識するようになる。このように日常人の他者理解は他者にたいする遠近法的視座構造によって制約されるが故に、常に他者は多元的現実として意味構成されざるをえない。要するにこの点はシュッツの他者理解についての重要な結論の一つであろう⁽³⁹⁾。

続いて、第3の問題「どのようにして、自我は他私の行動を、(a)一般に、(b)そのような行動者の主観的に思念された意味に則って、理解するのか？」について、考察することこそが、第4章「社会的世界の構造分析——社会的直接世界・共時世界・前世界」(Struktur-analyse der Sozialwelt, Soziale Umwelt, Mitwelt, Vorwelt)の章題の下で、シュッツが吟味検討する主要なテーマである。その際彼は「社会的世界」の「構造分析」を企てるに際して、構造分析の対象的世界を次の4種に区分する。それが有名な「直接世界」(Umwelt)、「共時世界」(Mitwelt)、「前世界」(Vorwelt)、そして「後世界」(Folgewelt)である⁽⁴⁰⁾。

そこで、まず「直接世界」というのはいわば face-to-face の体面的交渉が現に成り立っているような社会関係が展開される場のことである。それ故、日常人としての私にとってのここでの他者はまさに「同僚」(Mitmensch)という述語で表わされる。次いで、「共時世界」というのは同時代の社会的世界から上述の直接世界を除いた領域にあたる。ここでは他者は直接世界における汝としての同僚に代って、「同時代人」(Nebemensch)として意味構成される。以上二つの社会的世界と並んで、まず「前世界」というのは平たく言ってしまうと、本人の生まれる以前の社会的世界である。この「他者の行動の思念された意味」の世界は、私の体験や持続とは決して共存することのなかった歴史の世界である。したがって、これに対しては考察的に向かうことは可能であるとしても、行為的に向かうことは出来ない世界である。そして、シュッツは前世界における他者を「先人」(Vorfahre)と呼ぶ。また、最後の「後世界」はもはや私がいなくても、他私によって生きられる未来の世界である。そして、この世界に住むであろう他者は「後人」(Nachfahre)と呼ばれる⁽⁴¹⁾。

では、最終章＝第5章「理解社会学の根本問題」においては、「社会的世界を適切に調べるためには社会科学はどのような方法を用いなければならないのか？」という研究テーマをシュッツは究明しているので、われわれの検討もそこへ進めることにしよう。

まず、第5章での中心テーマは、マックス・ヴェーバーの社会科学方法論の基礎概念たる「理念型」(Idealtypus)が俎上にのせられ、社会的現実を究明する理解社会学の分析方法やフレームが検討されている。そしてシュッツ自身が「社会的世界のあらゆる科学の主題は、主観的意味連関一般ないしは特殊な主観的意味連関の客観的意味連関を構成することにある」⁽⁴²⁾と主張しているように、社会的世界という対象的与件を客観的・科学的意味連関に則って整序することを要請する。

そこで、シュッツによれば、科学は日常生活のなかで行われる未分化で曖昧な解釈を、最大限にはっきりした一義的な明晰さにまで高めることにその存在理由を有する点で、第1の要請たる「論理的首尾一貫性」が求められる。しかるに、社会科学の主題は主観的意味連関

の客観的意味連関への組み替えにあるから、社会科学の理念型は、一方で上記の「論理的首尾一貫性」の要請を満足させつつ、他方で「主観的意味連関」を動機に即して十分根拠のある意味連関として捉え直すというもう一つの要請、つまりこの第2の要請をシュッツは「適合性の要請」と呼ぶ。そして、社会学者はまず意識のモデルとしての「人格の理念型」を措定する。次いで、社会学者はこのモデルにもつぱら適合するような動機の解釈パラダイムを措定する。ところで、どのような人格の理念型を構成し、どのような動機あるいは典型的な行為を構成するかは、社会科学のそれぞれの「レリバンス」(relevance — 「有意性」と訳されることもある)によって異なる。そこから社会科学の類型構成のための第3の要請たる「レリバンス」の要請が求められる。なお、シュッツの現象学的社会学におけるキー概念の一つである「レリバンス」とは、われわれの関心の持ち方や問題の立て方によって、それとの関連性のある意識領域内における典型的知識体系のことである⁽⁴³⁾。しかも、第3の要請たる「レリバンス」の要請は、シュッツの死後に刊行された『レリバンスの問題についての考察』(Reflections on the Problem of Relevance, 1970)で詳述されたテーマであることを付記しておきたい。

4. おわりに——残された課題

われわれは、本小稿では「アルフレッド・シュッツ研究」を「ヨーロッパ社会学史の一齣」として、もつぱら1932年刊行の生前唯一の大著『社会的世界の意味構成——理解社会学序説——』に、これまで殆どの紙数を費やして論考を進めてきた。とはいえ、シュッツの所論の紹介に終始してしまった感は正直云って否めない。それ故、シュッツの『意味構成』に関しては、幸い哲学者廣松渉が『廣松渉著作集』第六巻で批判的省察を試みている⁽⁴⁴⁾。また、社会学者の山口節郎も『『現象学的』社会学は現象学的か——シュッツの『三つの公準』をめぐる——』と題して、「詳しく検討してみると、彼の議論のなかにはいくつかの重大な疑問点が含まれていることがわかる。たとえば、社会的世界の理念的構成物としての彼の『合理的行為のモデル』という考えは、はたして現象学の基本的視座と両立しうるのかどうか、あるいはそうした行為モデルと人間の自由の問題との関係はどうなるか、そしてまた、彼のいう『適合性の公準』はそれ自体のなかに、矛盾を含んでいないか、等々」⁽⁴⁵⁾と指摘する一文が認められている。さらには、社会学者の横山寧夫も「現象学と理解社会学——A.シュッツとM.ウェーバー——」という論文を書き、その論考のなかで、M.ウェーバーの理解社会学に対するシュッツの「寄与」に対しては肯定と否定の二つの異なった意見がある。そして、特に否定的意見として最近目についた論文だけあげても、たとえばJ.レックス、P.ラスマン、J.ローシェなどがおり、その一人J.レックスはウェーバーに対するシュッツの意義を全く認めない。彼(レックス)は言う、「客観的意味への現象学的強調はウェーバーの方法に対して本質的なものを多く失う。それはウェーバーが単に行為自身の客観的意味に関係するのではなく、構成的仮說的行為者の意味に関係しているのだということを誤認して

いる。そしてさらに人間行為の結果について単に意味ではなく、有意味的な社会関係についてウェーバーが問題としていることを誤認している。かくして一つの危険は現象学が社会学を矮小化し、ウェーバーが到達したような経験的現実の解明を決して行うことがないことである。かくしてウェーバーは「ただ主観的意味や状況における行為者の規定にのみ興味をもっているように見える現象学者とは鋭く区別されるのである」。こう指摘したあと、横山は自身「現在レックスのこのような意見と非常に近い立場にある」といつている⁽⁴⁶⁾。それ故、こうした諸文献をも是非とも一読願いたい。

また、われわれは「ヨーロッパ社会学史の一齣」というサブタイトルの下で、「アルフレッド・シュッツ研究」を試みたために、亡命後のアメリカでの諸研究、とりわけ『アルフレッド・シュッツ著作集』の第1巻・第2巻の『社会的現実の問題』や第3巻『社会理論の研究』、あるいは死後刊行された未完成の『レリバンスの問題についての考案』は体系的理論研究の一つであるから、こうした諸文献についても究明する機会を持たねばならない。この際、アメリカのプラグマティズムの土壌のなかで育ったシンボリック相互作用論の祖 G.H. ミード (George H. Mead, 1863-1931) の所論や、W. ジェームスの「意識の流れ」論との触れ合いによって、シュッツの現象学的考察の深化や展開が試みられているので、改めてこうした視点からの検討もまたれる⁽⁴⁷⁾。

さらに、シュッツが晩年に著述した「フッサールにける超越論的間主観性の問題」(Der Problem der transzendentalen Intersubjektivität bei Husserl, 1971) では、社会学においてこれまで試みられることのなかった新しい問題領域——間主観性問題——を発見し、それを社会的な問題として主題化する道を開いているので、「アルフレッド・シュッツと間主観性問題」を組上に載せた研究も残された課題の一つとしてある。その際、既に日本でも例えば平英美「A. シュッツと間主観性問題——フッサールの『デカルト的省察』に対する批判をめぐって」⁽⁴⁸⁾ や、寺沢夏子「社会学と間主観性問題——“主観主義”批判・再考——」⁽⁴⁹⁾ において、このテーマについて論考が試みられているので参考になろう。

そして、シュッツの個別研究といえ、ば、「よそ者」や「帰郷者」などの論文にみられる社会学への彼の理論の応用をはじめとして、「多元的現実」論と「生活世界」の関連をめぐる知識社会的考察、「シンボル、現実、社会」の言語社会的考察、タルコット・パーソンズとの社会的行為論の論争（この点に関しては既に第2節でも若干触れておいたように）、C.G. ヘンペル (Carl G. Hemper) や E. ネーゲル (Ernest Nagel) との科学論の論争等々⁽⁵⁰⁾、大げさに言えば枚挙に遑がない程多方面にわたるアメリカでの活躍を通して、われわれはシュッツの構想の進展を見ることも、当然残された課題として挙げ、ひとまず本小稿の執筆を終えることにしよう。

註

(1) 大学教育社編『現代社会学事典』(おうふう、1994年) 456頁。

- (2) 木田元ほか編『現象学事典』(弘文堂、1994年)において、佐藤嘉一が記述する「シュッツ」の項(522頁)。
- (3) 青井和夫『社会学原理』(サイエンス社、1987年)226頁。
- (4) 渡辺静夫編『日本大百科全書』11(2版第1刷)(小学館、1994年)において、山岸健が記述する「シュッツ」の項(670頁)。
- (5) 永井均ほか編『事典哲学の木』(講談社、2002年)977頁。
- (6) トム・キャンベル著、野村博・加藤信孝監訳『人間社会に関する7つの理論』(晃洋書房、1994年)における第九章「アルフレッド・シュッツ——現象学的アプローチ」の箇所(229頁)。
- (7) 森岡清美ほか編『新社会学辞典』(有斐閣、1993年)において、山岸健が記述する「シュッツ」の項(716頁)。
- (8) 今村仁司編『現代思想を読む事典』(講談社、1988年)において、江原由美子が記述する「現象学的社会学」の箇所(199頁)。
- (9) 見田宗介ほか編『社会学事典』(弘文堂、1994年)において、江原由美子が記述する「シュッツ」の項(450頁)。
- (10) 森岡ほか編『新社会学辞典』において、秋元律郎が記述する「ドイツ／ドイツ語圏の社会学」の箇所(1571頁)。
- (11) 富永健一編『理論社会学の可能性——客観主義から主観主義まで——』(新曜社、2006年)において、森山和夫が記述する第I部「理論社会学を求めて」第2章「規範的探求としての理論社会学」の箇所(36頁)。
- (12) 富永健一『社会学講義』(中央公論社、1995年)336-337頁。
- (13) 北川隆吉監修『現代社会学辞典』(有信堂、1984年)において、池田昭が記述する「宗教」の箇所(325頁)。
- (14) アルフレッド・シュッツ著、佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成——ヴェーバー社会学の現象学的分析——』(木鐸社、1984年)1頁以下。
- (15) 廣松渉『廣松渉著作集』第六卷(岩波書店、1997年)94頁。
- (16) キャンベル著、野村・加藤監訳、前掲訳書における229-230頁やシュッツ著、佐藤訳、前掲訳書、における訳者の「解説とあとがき」の箇所(369頁)参照。
- (17) 新明正道・鈴木幸寿監修『現代社会学のエッセンス(改訂版)』(ペリカン社、1996年)において佐藤嘉一が記述する「18 シュッツの理論」のなかの特に「1生涯と学問」の箇所(286-287頁)参照。
- (18) 同上。
- (19) Arfred Shutz, *Collected Papers*, vol.1, 1962, preface, p. ix . 廣松『廣松渉著作集』第六卷、394頁参照。
- (20) 平秀美「A. シュッツと主観性問題——フッサールの『デカルト的省察』に対する

- 批判をめぐって——』『ソシオロジ』第24巻1号(社会学研究会、1979年)41-58頁参照。
- (21) 新明・鈴木監修、前掲書における佐藤、前掲論文、287頁参照。
 - (22) 木田ほか編『現象学事典』において、西原和久が記述する「至高の現実」の項(182頁)や、那須壽が記述する「多元的現実」の項(311頁)。
 - (23) 富永『社会学講義』、337-338頁参照。
 - (24) 木田ほか編『現象学事典』において、佐藤が記述する「シュッツ」の項(522-523頁)参照。
 - (25) 新明・鈴木監修、前掲書において、佐藤が記述する前掲論文の箇所(288頁)参照。
 - (26) 見田ほか編『社会学事典』において、栗原彬が記述する「エスノメソドロジー」の項(91頁)参照。
 - (27) 見田ほか編『社会学事典』において、船津衛が記述する「シンボリック相互作用論」の項(497-498頁)参照。
 - (28) シュッツ著、佐藤訳、前掲訳書、4頁や、森岡ほか編、前掲書において、秋元が記述する「ドイツ／ドイツ語圏の社会学」の箇所(1571頁)参照。
 - (29) 木田ほか編、前掲書において、山口節郎が記述する「現象学的社会学」の箇所の特にⅢ「日常生活の社会学」の項(131頁)。
 - (30) 同、131頁や、今村編、前掲書において、三島憲一が記述する「フッサール」の箇所(740-741頁)参照。
 - (31) 見田宗介ほか編『社会学文献事典』(弘文堂、1998年)において、訳者佐藤嘉一が記述する「シュッツ『社会的世界の意味構成』1932年刊」の箇所(62頁)参照。
 - (32) Alfred Schutz, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt——Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, 1932. S.3-4. (佐藤訳、前掲訳書、16-17頁)。
 - (33) *A.a.O.*, S.5. (同、19頁)。
 - (34) *A.a.O.*, S.12. (同、27頁)。
 - (35) 廣松、前掲書における第一章「シュッツ社会哲学の構案」第二部「意味の五層と三大問題圏」の箇所(43-47頁)参照。
 - (36) *Schutz, a.a.O.*, S.41. (同訳書、59頁)
 - (37) *A.a.O.*, S.39. (同、97頁)
 - (38) *A.a.O.*, S.106. (同、135頁)
 - (39) 佐藤嘉一「自己理解と他者理解——A. シュッツの『社会的世界の意味構成』をめぐって——」『社会学評論』第32巻3号(日本社会学会、1981年)9-12頁参照。
 - (40) 廣松、前掲書、199-203頁や、見田ほか編『社会学文献事典』において、訳者佐藤嘉一が記述する前掲論文の63頁参照。
 - (41) 同上。
 - (42) シュッツ著、佐藤訳、前掲訳書、311頁。

- (43) シュッツ著、佐藤訳、前掲訳書における訳者の「解説とあとがき」の箇所（381-382頁）参照。なお、「レリバンス」については、森岡ほか編、前掲書において下田直春が記述する「レリバンス」の項（1508-09頁）参照。
- (44) 廣松、前掲書におけるⅠ「理解社会学への私のA. スタンス」とⅡ「現象学的社会学の祖型——A. シュッツ研究ノート」——」の箇所（1-401頁）。
- (45) 山口節郎「『現象学的』社会学は現象学的か——シュッツの『三つの公準』をめぐって——」『社会学評論』第32巻3号（日本社会学会、1981年）36-53頁。
- (46) 横山寧夫「現象学と理解社会学——A. シュッツとM. ウェーバー——」『近代社会学の諸相——阿閉吉男教授定年退官記念論文集』（お茶の水書房、1973年）139-162頁。
- (47) 木田ほか編『現象学事典』において、佐藤が記述する「シュッツ」の項（522-523頁）参照。
- (48) 平、前掲論文、41-58頁。
- (49) 吉沢夏子「社会学と間主観性問題——“主観主義”批判・再考——」『社会学評論』第35巻2号（日本社会学会、1984年）2-16頁。
- (50) 木田ほか編『現象学事典』において佐藤が記述する「シュッツ」の項（533頁）参照。